

PART6 1
世界の潮流

フィンランドにおけるヘルスケア×AI

国際社会経済研究所
主幹研究員(NECCグループ)

遊間 和子



8」では、データはデジタル新時代の価値の源泉であるとされ、AI・IoT(モノのインターネット)などの最先端技術を活用して社会変革を進めていくことが示されており、次世代ヘルスケア・システムの構築も重点分野のひとつに挙げられている。このようなヘルスケア分野のAI活用への取り組みは日本だけでなく、世界で激

20年に向け改革



しい競争が起きている。本稿では、積極的な取り組みを進めるフィンランドの状況を2回にわたって紹介していく。

高福祉で知られる北欧諸国のひとつであるフィンランドは、世界有数の情報技術大国でもあり、ICT産業の発展により国際競争力を高めてきた。しかし、フィンランドの代輸出産業であるICT産業の衰退は国家的危機となっており、本誌に高年齢化が進むフィンランドは、人口減や労働力不足に悩んでいる。市民に対するための大きなけん引として期待されている。医療サービスや社会福祉サービスの提供責任は基礎自治体kuntaにあるが、少子高齢化が進めば、小規模で財政的に弱い市町村はそれが難しくなることから、2020年に向けて「医療と社会福祉改革SOTE」を進めていく。

ヘルスケア分野のフィンランドの強みは、高品質で大量のデータが蓄積されていることにある。すべての市民に社会保障番号HEUが付番され、電子健康保険証となるKELAカードだけでなく、行政サービス、納税、医療、銀行などさまざまな分野で横断的に利用されている。2007年からは全国医療情報アーカイブKantaが導入され、全国レベルの医療データ共有に加えて、社会保障番号でひもつけられた医療データが蓄積できており、これがAI活用を進める基盤となっている。(金曜日に掲載)

広域連合が提供

この改革は、基礎自治体ごとではなく、18郡に分けられた広域連合が医療と社会福祉サービスを統合した形で提供するとともに、個人々のニーズに合わせることができる自由を増やしていくことを目指している。AIは、この制度改革を実現している。(金曜日に掲載)

蓄積データで制度改革

人工知能(AI)の研究は1950年代から行われてきたが、大量のデータを学習することでAI自身が知識を獲得する「機械学習」と言われる技術が発展したことで大きな注目を集めるようになった。機械学習の一つであるディープラーニングによるアルファ碁がプロ囲碁棋士に勝利し、IBMの「ワトソン」

が非常にまれな病名を短時間で見抜くという事例が続々と出てくることで、現在、第3次AIブームと言われる状況にある。AIの活用分野は多岐にわたるが、健康・医療・介護といったヘルスケア分野におけるAI活用にも期待が集まっている。先日、内閣官房から発表された「未来投資戦略201